妻の持つ扇

川口松太郎

桃源社・刊

昭和三十七年九月十日　印刷
昭和三十七年九月十五日　発行

定価　三九〇円

著作者　川口松太郎
発行者　矢貴東司
印刷者　北山　茂

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蛎殻町一ノ一二
電話（六七一）四〇〇一・二番

妻の持つ扇
一九六二©

目次

月の出……五
母情……三三
遙かなる丘……六二
生活の波……九五
迷路……一二六
その夜……一六〇
独居……一八九
二つの場合……二一七
働くという事……二四八
変転……二九九
子供たちの春……三二六

裝幀　三井永一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妻の持つ扇

月の出

一

「いらっしゃる？」
と、細目に開けたドアの隙から、美しい目がきらきら光って
「入っても好い？」
と、栗鼠のように素早くするりと部屋へ辷り込んだ。閉め切った部屋に女の匂いがふんわりして
「お母さんが見えないんですけれど、ご存じない？」
「知らない」
「変でしょう」
「何が……？」
「だってお部屋がきちんとして、机の上も綺麗に片づいているし、何時もは無雑作に棄ててあるものも、すっかり整理が出来て、よそよそしいくらいきっちりしているんです」
「買物にでも行ったんじゃないか。あきに訊いてごらん？」
「女中達も知らないの。私も、今朝はまだお目にかかっていないし、あきがお昼の相談に来たんで、お部屋へ行って見て、あんまり綺麗に片づいているのが気になってしまったもんだから。お兄様も見て下さらない？」
「見よう」
躊躇わずに椅子を立った。手のつけられないほど乱雑に散らかっている書籍の山を、飛び越えるようにして廊下へ出ると、綾子も直ぐ続いた。どちらにも共通の疑いが牧子の上に浮んでいる。何時かはこんな事のありそうな予感が鉄男にも綾子にもあった。
「とうとうやったかな」
と、声には出さずにそっといったが、綾子には聞えなかった。鉄男の部屋と牧子の部屋とは東のはずれと西のはずれで、山科家の両端にあった。昼でも電燈の必要な暗い中廊下を走りぬけ、日本座敷の襖をあけると、畳の匂いがぷんとする。八畳と四畳半の二間で、四尺の縁側が綺麗に拭き込まれ、秋の庭が光って見える。障子際の小机に、蒔絵の硯箱が行儀よく置かれて一枚の紙も散らばっていない。平常は男のように投げやりで、無雑作に散らかして平気な牧子が、部屋中を綺麗に片づけて、何処となくよそよそしい。

川越図書館蔵書

「ね、何だか冷たい感じでしょう」
鉄男の肩から覗くようにいった。
「何か持ち出してるのかい？」
「何かって……」
「旅行鞄とか着物とか」
「まだ調べてはいないけれど、まさか……」
まさかと、力をこめながらも、綾子の顔には血の気がなかった。四畳半の小襖も開けたが小部屋の戸棚も綺麗に片づいて、整理の跡がはっきり判る。何を持ち出しているのか、まるで判らない。
「みんな片づいている。押入れの隅々まで」
と、鉄男も顔を硬くして
「計画的だな。覚悟を決めて家を出たに違いない」
「だってまさか……」
と、綾子は再び「まさか」といったが、顔はいよいよ蒼ざめて、やがてがくりと首を垂れた。

二

鉄男は、廊下の籐椅子に腰を降して、部屋の中をぐるぐると見た。疑う余地のない家出の跡の白々しさが、部屋中に漂っている。
「綾さん！」
「はい」
「お母さんは覚悟を決めたんだ。何時かはこんなことになりそうな予感があっただろう。とうとう辛抱が出来なかったんだよ。斯うするより他には道がなくなってしまったんだ。君にしたって寝耳に水という訳でもないだろう。来るべきものが来てしまったんだよ」
「そんなら何か書き残したものでもあるんじゃないでしょうか」
「そんな必要はないさ。出て行く先も、その相手も判っているじゃないか」
「相手！」
「そうさ。相手じゃないか」
「上月さん？」
「無論そうだろう」
「やっぱり本当なんでしょうか」
「本当だと思う。思いたくはないけれど、上月より他に理由はない」
「やっぱり……」
生つばをごくりと飲んだ。どうしたら好いのか判らぬ感情が熱い湯になってこみあげてきた。
「上月さんのお宅へ行ったんでしょうか」
「場所は判らないが、上月である事に間違いはない。よくよく考えた結果だと思う」
ポケットから煙草を出したがマッチがないので、喫いつけずに、指先で弄びながら、
「お父さんは何にも知らないんだろうね」

「ええ、無論！」
「然し、うすうす気づいてはいるんだろう」
「そんな問題に触れたくないもんだから、考えた事もありません」
「女中達は気がついているのかい」
「まだ誰も何ともいわないし、私も今しがた気がついて、お兄様の部屋へ飛んで行っただけなんですから、恐らく誰も知らないと思います」
「気づかれないようにするのが第一だね」
「ええ」
深く頷いた綾子の顔はもう蒼くなかった。予期があっただけに、平静に戻るのも早かった。
「上月の家へ行ったとすれば、叔母の敗北だ。家出は好いにしても愛人の家へ行ったのでは」
「そうよ。本当にそうよ」
「一先ず宮之川へ戻って、それから行動しなければいけない。それでなければ不貞の焼印が消えて行かない」
「私だって厭よ。母にそんな間違いがあっては」
「然し、此処を去るのは仕方がないよ。罪は叔父にあるんだからその点は認めざるを得ないだろう」
「仕方がないわ」
と、綾子は悲しげに、そして素直に頷いた。

三

その夜の月の出は遅かった。早い雲足の、ちぎれて飛んでいる空に、十八日の月が歪に浮んでいる。鉄男は庭石に立ち、綾子は萩のくさむらの中にいた。
「叔父は今夜も帰らないのかな」
「ええ、もう十一時ですから」
「ちょうど三日目だね」
「女中達を寝かせてしまいますわ」
今はもう父を非難する気にもなれない。座敷へ上ってあきを呼ぶと
「鉄兄様、もう何にも要らない？」
と、まだ庭に立っている鉄男にいった。
「ウィスキーを貰おうか。もしあったらチーズと」
「ございます」
と、あきが無表情に、注文の品々を縁側へ運んだ。
「此処の戸締りは私がするから、寝んで頂戴！」
と、銀盆を受取って綾子は又庭へ降りる。芝草の上に鉄製の卓子が雨ざらしで錆びつき、庭の手入れも行き届かず、広い家中が何処となくすさんだ感じだ。
「濃い方が好い？」
「僕がやる」
「いいえ、私にやらして」
と、盆の上でタンサンを抜き、手頃の濃さに混ぜながら

「お酒飲みの旦那様を持っても、勤まるように」
と、淋しさの中から笑った。不幸な綾子の、限りもない孤独を、自分のもののように感じながら
「君が一等可哀想だね」
と、初めて口に出した。
「厭よそんな事おっしゃっちゃ。優しくされると辛抱出来なくなるし、今はまだ泣いたり悲しんだりしたくないわ。仕事が沢山あるんですから」
「あり過ぎるほどあるよ」
「何から先にすればいいのか教えて……」
早口に、鉄男の声を封じるようにいった。優しくされると涙が出かかる。感情を抑えつけて、処理を正しくせねばならない。
「何よりも先ず、お母様の居所を確めなければならないでしょう」
「そんな事は簡単に出来る」
「お父様の帰らない内に会って来て下さらない?」
「会っても無駄だろう」
「いいえ。此処へ戻って頂く意味ではないの。出て行くのは仕方がないと諦めているんだから」
「帰って貰おうとは希望しないのかい」
「希望したって駄目でしょう。出て行った以上はお帰りにならないわ」
「綾さんが自分で会ったらどうだ」
「鉄兄様の方が好いのよ。なまじ私が感情的になったりするより、お母様だってずっと気が楽だと思うわ」
「それもそうだな」
雲の切目から、月が見えたり隠れたりする。鉄男は二杯目の酒を自分で作って萩の乱れている道を、無意味に歩き出した。広い庭の正面に老松が高々と聳えている。その松の上にも、白っぽい雲がちぎれて飛んでいた。

四

上月隆(とうまたかし)は音羽の護国寺の裏にいた。その翌る朝。鉄男は隆の家の前に立った。隆と並んで、上月早苗の名も、古ぼけた檜板に書かれている。上月は丸の内の劇場会社に勤める写真技師であった。早苗はその妹で、隆の名を知るものはなくとも、早苗の名は広く知れ渡っている。人気の長くつづく映画女優だ。此の辺の町作りは、明治時代の東京を思わせるような一種の風趣を持っている。生垣の角の門前で暫く躊躇していたが、やがて思い切って門をあけた。葉鶏頭の、鮮やかな色が目に痛いほどだった。
「上月隆さんいらっしゃいますか」
腹にぐっと力を入れて取り次ぎの女中にいった。
「お留守でございます」
わだかまりのない顔で小女が答える。どうせ会えまいと思っていただけに
「劇場の方はお休みなので、お宅へ伺ったのですが……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「御旅行にいらしったんです」
と、女中はまた直ぐいった。
「行く先がお判りでしょうか」
「失礼ですがどちら様でしょう？」
「山科です」
と、名前に力を入れて大きくいった。流石に女中もはっとしたらしく、次ぎの間へ去って、少しの間、誰も出て来なかった。山科の名を聞いたあとの動揺が感じられる。
「お待たせをいたしました。一寸どうぞお上り下さい」
女中でない声が、襖口から少し顔を覗かせた。一目でそれが早苗だと判った。十畳ほどの日本座敷へ通されると、床の間に栖鳳の茄子の絵がかけてあり、赤絵の支那陶器が飾ってあった。
「私は上月の妹でございます」
早苗は、ぎこちなく座っていった。無雑作なワンピースに、形の好い足を畳にきちんと折り曲げている。
「僕は山科鉄男といいます」
彼も同じぎこちなさで、ズボンの膝を気にしながら
「山科牧子をご存じでしょうか」
「存じ上げております」
きっぱりし過ぎるほどきっぱり答えた。整った顔に、意志の強さが浮いている。「存じ上げております」といわれた瞬間に鉄男はほっとした。返事によっては話のもつれる問題なのだ。
「牧子は僕の叔母ですが、千駄ケ谷の家におりますので」
「それも存じ上げております」
と、早苗は再びきっぱりいった。
「叔母から聞いて下すったんですか」
「残らず伺っております。貴方がお姉様のお子さんである事も、御両親が早くに亡くなって、千駄ケ谷のお宅に引き取られて御成長なすった事も、大変な秀才でいらっしゃる事も……」
「それだけは嘘です」
と鉄男もきっぱりいった。

五

いいながら、自然な微笑が、たくまずして顔中に拡がった。
「どうぞ御遠慮なくおっしゃって下さいまし。お宅からお人の見える事も覚悟しておりましたし、兄と牧子様とが、こんな結果になって行く事も、前々から判っておりましたし、困った事だとは思いながら、どう防ぎようもございません。兄は偏窟な男で、今だに結婚もせず一人でおりますので、恋愛なぞ一生出来ないたちの人間だと、自分でも諦めておりましたのが、牧子様とあんな事情になってしまって、私達が驚くよりも、兄自身が驚いているのです。遊び事の出来る人ではありません。真剣に考えて行動したのですから、それだけに、私も、嘘や誤魔化しをいいたくはあ

りません。問題が非常に難しく、解決も困難だと思いますので、覚悟を致しておりますからどんな事にも驚きません。遠慮なく、ありのままをおっしゃって下さるようにお願いいたしたいのです」

歯切れのよい声でてきぱきいった。足のしびれを感じて

「失礼します」

と、思い切って膝を崩すと、早苗はさも恐縮したように

「どうぞ、どうぞお楽に。気のつかない事をいたしまして」

「貴女もどうか。座っていらっしって窮屈でしょう」

「いいえ、大丈夫です」

「畳に馴れないものだから、しびれが切れてしまって」

「本当に気がつきませんで……」

と、気の毒そうに、いたわりながら、美しい目が少し笑った。固い結び目のほどけて行くような温かさを感じて

「おっしゃる通り解決の難しい問題です」

と、真面目にいった。早苗は自然な形に頷いて

「兄も牧子様も、さんざん考えて斯うなったのだと思います。どれほど困難であろうとも、正しく解決をつけねばならないと思っています」

「然し叔母は山科の妻ですから、解決にも順序が必要です。簡単に決める事は出来ません」

「けれども、二人の意志を尊重してあげなければ、一切が破滅になるでしょう」

「破滅？」

「ええ破滅です。山科様へも疵がつき、兄や牧子様も御無事ではすみません」

「具体的にいうと、どういう事です」

「命をかけているという事です」

早苗の顔がこちこちに硬くなった。が鉄男はそれが一番知りたかったのだ。

「とすると、死を覚悟しているという意味ですね」

「私にはそう見えるのです」

「叔父の立場を考えたらどうなるでしょう」

「此の場合、双方を考えたら解決はつきません。私は兄と牧子様を考えますから、貴方は山科の御主人と綾子様のお心持になってあげて下さいまし」

綾子の名もはっきり出た。事件にからまる一切の血脈を知っているのだ。

六

解決の困難な問題は、鉄男と綾子と早苗の間に数回の折衝があった。山科正俊は勧業銀行の総裁で大きくいえば、日本一方の柱に立てられている人物だ。人望のある温厚な事業家だが、家庭生活は幸福でなかった。牧子に欠点があったのか、正俊に過失があるのか、夫婦間の秘事は誰にも判らない。家庭を楽しまない正俊の生活態度は身辺の多勢が知っている。綾子は夫婦間の一粒種には違いないが美し

い綾子の存在も、夫婦生活を調整する道具にならなかった。正俊と牧子とは十年近くも夫婦のいとなみを持っていない。赤坂の山王に別宅があって、本邸に戻る日は一週に一日と決められている。

「奥様は冷たいお人！」

という噂が立って、愛情の乏しさを牧子の罪にしているようだ。

が、鉄男は

「必ずしも叔母のみの罪ではない」

と思っているし

「公平に見てお父様もお母様もよくない」

と、綾子は前からいった。

「夫婦間の問題は夫婦だけで解決すべきで、他人が喙(くちばし)をさしはさむべきではない」

と、鉄男は何時もいった。

「鉄兄様はそれで好くっても、私には直接の問題だから、棄てて置く訳には行きません」

と、綾子は必ず抗弁した。

「さりとてどうする事も出来ないだろう」

「だから、お父様にもお母様にもお願いするのよ。もっと家庭を明るく楽しくして下さるようにって……」

「頼んで明るくなる程度なら結構だがね」

そんな問答のある内はまだ好かった。良人の愛情に絶望した牧子は、好きな写真に凝り出して、上月隆と知り合いになった。千駄ケ谷へも遊びに来て鉄男や綾子も知り合いになった。初めは

「お母様に好い趣味が出来て嬉しい」

と、綾子も思ったし

「こんな事で気がまぎれれば何よりも好い」

と、鉄男も思った。そして上月の来訪を喜んで、好意のある歓待をした。牧子の作品が写真展覧会へ出たり、キャメラ雑誌にも掲載され、美しい交遊が五年も続いて波乱も事件も何もなかった。なかったのではなく、ないように見えただけで、その実は、激しい苦悶が続いていたのだ。愛してはならない相手を、双方から愛し初めて、抜きさしのならない愛欲の深みへ同じように落ち込んでいた。

鉄男と綾子が気付いたのは、今年の夏頃で

「母と上月さんのおつき合いは、あのままで好いでしょうか」

と、綾子がささやいた事がある。

「問題だね」

と、鉄男もあたりを見回していった。

「お母様のお心には風穴があいていらっしゃるでしょう。上月さんがその穴を埋めたんじゃないでしょうか」

「そうかも知れない」

こんな話をした時には、どうしようもない最後の時が迫っていたのだ。

七

綾子は母を、鉄男は叔母を、非難する気になれなかった。

「母に愛人が出来ても仕方がない」

と、つぶやく声には、父の私生活を恨む響きをふくんでいる。

「叔母だってまだ四十になったばかりなんだから朽ち果てさせるのは可哀想だよ」

「ええ、そりゃア……」

「上月君も好い人だからな」

「だからどうしようもないのよ。厭な奴なら憎んでやるけれど、あんな好い人ではとても憎めない」

「さりとて、間違いを起して貰いたくないな」

「そんな無茶はしないと思うけれど……」

こんなささやきの間もまだ好かった。無口な上月と、穏やかな牧子の静かな愛情は、一脈の不安を感じさせながらも、表面は美しい交遊に見えていた。正俊も上月を知っている。留守勝ちな良人への不満を、まぎらそうとする妻の心を了解していた。その了解が、夫婦の溝を次第に強く深めて行った。

「大きな失敗にならなければ好いが」

と、疑った不安が、理性の堤を切り破って、とうとうこんな結果になった。隆と牧子とは家にも帰らず、早苗にも行く先を明さず、知らぬ国へのがれてしまった。

「もしかすると死ぬかも知れません」

と、早苗は落着いていう。

「それでも仕方がないでしょう。生きていて多勢に御迷惑をかけるよりは、さっぱりと死んでしまった方が、皆さんにも諦めがつくと思います」

「一人だけ諦めのつかない者があります」

と、鉄男がいうと

「綾子さんですか」

「ええ。母を恋うるいじらしさが堪りません」

「でも、貴方がいらっしゃるから好いじゃありませんか」

「僕が?」

「どうせもう近い間に御結婚なさるんでしょう」

「僕がですって?」

「お約束が出来ているんじゃありませんか」

「此奴は驚いた」

鉄男は笑う事も出来なかった。誰からも、こんな話を聞かされた覚えがない。呆れて早苗を見つめながら

「僕と綾子とは従兄妹です。兄妹同様に育っているし、結婚なぞ考えた事さえない」

「でも私、そんな風に伺いました」

「僕は今初めて聞きましたよ」

「だって牧子さんもそのようにおっしゃいましたよ」

「僕はまだ一度も聞いていない」

鉄男は不機嫌にいった。脇道へそれた話を引き戻して

「叔母と隆君の行く先は本当に判らないんですか」
「私が知っていて隠しているとお思いになるんですか」
「いいえ」
と、首を振りながらも、かすかに相手を疑っていた。

八

母の恋人！
何時かはこんな結果になりそうな予感が、事実になって目の前にある。
「お母様が子供で、綾子が親のような気がするわ」
と、綾子はいった。
全くそんな感じだった。
「居どころが判ったら直ぐに電話をくれる約束になっている」
と、早苗に別れて帰った鉄男は、諦めたようにいった。
主人の正俊はまだ帰らない。
「お父様に知らせなくっても好いかしら」
「知らせない方が好い。もしも叔母が帰って来たら、何もなかった事にすれば好いし……」
「いやなお兄様、今更何もなかった事になりっこないじゃありませんか」
「そうかな」
「あたし、お帰りになっても一緒に住む気はなくってよ。上月さんと結婚して御幸福になれれば喜んであげるけれど、知らん顔で帰って来ればとても厭だわ」
「なかなか潔癖だね」
「その考え、間違っている」
「いいや立派だ。立派過ぎて非の打ちどころもないが、お母さんを棄ててしまって淋しくないかい」
「お兄様がいて下されば淋しくないわ」
「……？」
鉄男はふっと言葉につまった。深い意味もなく、さらりといい流したには違いないが、はっきり返事が出来なかった。両親を同時に失った自分と同じように、綾子も親を失おうとしている。
「お兄様がいるから淋しくない」
声の裏にあるいじらしさが胸を突く。もしこれが他人なら抱きしめて愛情の雨を降らせてやったものを、血脈に繋がる自戒が心を引き戻す。法律では許される四等親だが、近親結婚は種族に弊害を残しやすい。彼はまだ綾子を対象に考えた事は一度もなかった。
やがて上月早苗から電話があって
「お二人の居どころが判りました」
と知らせて来た。
「牧子様も御無事です。死のうとしてもなかなか死に切れなかったそうです」
「そんな事を電話でいってはいけませんよ」
と鉄男はたしなめるように

「場所は何処です」
「それがとても不思議なところで、一寸想像がつきません」
「遠いんですか」
「ええ、相当！」
「日本の内でしょうね」
「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふ」
明るい笑い声が受話機に跳ね返った、釣り込まれて笑い出しながら
「何処なんですよ、一体？」
「当ててごらんなさいまし」
「関西？」
「ええ、西に近いんです」
「東海道線」
「岐阜から少し別れて……」
「あ判った」
「何処？」
「下呂温泉か、それとも飛騨の高山！」
「そう、その高山です」

九

声が明るく楽しそうに聞える。子供が、ピクニックにでも行くように、浮き浮きした話し声に、鉄男もうっかり釣り込まれて
「洒落たところへ行きましたね」
「本当よ。飛騨の高山なんて、ちょっと行ってみたくなる場所じゃありませんか」
と、いよいよ明るく
「ずっと前から、一度行きたいといってましたし、画材の沢山ありそうな土地ですから、キャメラでもぶら提げて楽しんでいるのかも知れません」
「そんなのん気な場合じゃないんだがな」
「本当に」
「こっちは目を丸くして騒いでいるのに、キャメラをぶら提げてるんなんて憎いな」
「でも初めは深刻だったらしいんです。どうせ死ぬなら、気持の好いところへ行って死にたいなんて。方々を探して最後に高山へ行ったんですって」
「そんな考えがすでに怪しからん。死ぬのに場所を選ぶなんて」
「でも然し……」
と、やや真面目に
「どうなさいます？」
「僕は迎えに行きます」
と、鉄男は躊躇なくいった。居所が判れば直ぐに馳けつけたい心だ。
「私も行きます」
「そんなお暇がありますか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com